

# 金剛寶戒寺便



令和八年七月一日発行 第一四八号

檀信徒の皆様、こんにちは。ワールドカップサッカー日本対ブラジルは残念な結果となりましたがこれからも応援し続けます！

六月二十二日、光西寺様にて大分市仏教会による「法話コンサート」が開催されました。かつては「暁天講座」として七月の早朝に開いておりましたが、参加者の高齢化に伴い、近年は日中の開催へと工夫を凝らしています。今年も長福寺様のご提案で趣向を変え、山口県よりシンガーソングライターの「ちひろさん」をお招きしました。ちひろさんは童謡詩人・金子みすゞの詩に自ら作曲した楽曲を中心に活動されている方です。その優しい歌声を通して、みすゞの詩の根底にある「すべての命を慈しみ、共に生きる」という仏教に通じる温かい心を、百名以上の参加者と共有できました。当日は約五万円のご寄付もいただきました。歳末助け合い募金へお届けしますことをご報告いたします。仏教会の活動としても大変有意義かつ大変有難いご縁を頂いたと感じております。

このコンサートに先立ち、六月の法話の会では「金子みすゞの生涯」と題してお話をいたしました。山口県の小さな漁師町に生まれた金子みすゞ（本名テル）は、本を愛する

聡明な少女に育ち、日常の小さな命に寄り添う童謡を紡ぎ始めました。その才能は詩人・西條八十に「若き童謡詩人の巨星」と絶賛され、まばゆいデビューを果たします。

しかし、大正十五年に結婚すると運命は暗転します。夫から詩の創作や文学仲間との交流を禁じられ、さらに夫からうつされた淋病にも苦しめられたみすゞは、ついに離婚を決意しました。

ところが夫は、最愛の長女の親権を渡さないと主張します。「娘には心の糧を与えて豊かに育てたい」と願ったみすゞは、昭和五年三月、二十六歳の若さで自ら命を絶しました。娘を自分の母に託したいという、命を賭した遺書を遺しての決断でした。彼女の死から半世紀以上が経った昭和五十九年、姉の才能を信じ続けた弟たちの尽力により、ようやく遺稿集が出版されました。

私は、彼女がこれほど不遇な人生を歩んだことを知りませんでした。なぜ夫から娘を守るために自分の命を掛けなければいけなかったのか？また同時にそれほど大変な境遇にありながら、なぜあのような優しい詩が書けたのかに深く興味を持ちました。

仏教には「一切衆生悉有仏性（いっさいしゅじょうしつうぶっしょう）」という教えがあります。「生きとし生けるものはすべて等しく仏の種を持っており、見捨てられる命はない」という意味ですが、みすゞは詩の対象

にこの「仏性」を見出していたように感じます。また、この言葉に続く「如来常住無有変易（によらいじょうじゅうむうへんい）」は、「仏様の慈悲はいつでも、どこにでも満ちていて、決して変わることがない」という意味です。

彼女が育った仙崎という港町は浄土真宗が深く根付いた土地でした。どれほど過酷な境遇にあっても、「如来様につねに見守られている」という確かな信仰心と「安心（あんじん）」が、彼女の詩には込められているのではないかと感じました。

女性の権利が認められなかった大正から昭和初期。女性が総理になる令和の今には理解しがたい閉塞感や、女性にとって生きづらい時代だったと思います。「このころの大切さ」に身を置いた彼女が、命に代えても守りたかったのが、娘さんの「このころ」だったのだろうと思います。

皆様はどう思われますか？ぜひ、感想などをお聞かせいただけましたら幸いです。

○本堂と境内の大掃除

八月九日（日曜日）朝六時から一時間

○盆月は法話の会と写経はお休みです。

梅雨晴れや 長靴の中の みずたまり

小さいころ雨が上がるの帰り道、水たまりで遊びながら下校していた頃の風景を月忌に何う道中に車窓から見つけた一句です。